

「薄化粧の女性」

鷹尾 寛

大平さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。当時、西欧各国の配当税制調査団長として西ドイツにいた私が、ホテルの一室で大平さんの訃報を聞いたのは午前二時頃であった。高松高商、東京商大時代からほぼ半世紀の歳月を共に語り、助けたり助けられたりしてきた人間性豊かな大平さんのありし日の思い出が、走馬灯のように脳裡を駆けめぐっているうちに夜は白んでいた。

大平さんが東京商大に在学中は、思想史とりわけ経済思想史に興味を持たれ、経済社会学者であると同時に言語学者であった上田辰之助先生のゼミナールを受講され、「言葉を大切にすること」を教え込まれたわけである。頼まれる人ことに選ばれた華麗な色紙の語録とか、巷間で揶揄された大平さんの話し方の背景には、この青春時代に感得された「一言重百金軽」という大平哲学の厳存が偲ばれるのである。また大平さんは経済法の吉永栄助先生、行政法の田上穰治先生を中心とした法律研究会にも参加され、きわめて幅広く学問を身につけてこられた。かくて在学中に高文の行政科試験にあっさり合格されたわけだが、その祝勝会の席上でのご挨拶もまた印象深いものとして私の記憶に残っている。試験の答案は「薄化粧の女性」の如く謙虚に書くべしというのである。凡人は、つつい「あれも知っている。これも知っている」といつくあいに、採点者の心も知らずにゴテゴテと厚化粧の答案を書き、結局「化粧くすれ」で地肌を露呈するというわけである。

昭和五十三年十二月七日に組閣を終えた直後の十日の日曜日、たまたま私が幹事で開催した東京バーデイクラ

ブの「太平会」に参加された。「総裁選」に続いて「組閣」の難関を突破された直後のことでもあり、さぞや心身ともにお疲れのことと一同拝察していたが、シヨットは好調で「優勝」ということになったのである。プレイ後のパーティーの席上での記者団に対するご挨拶で、私はまたまた感銘を新たにしたのである。「二カ月ぶりにはよく当たったヨ。しかし、明日の新聞に優勝したとは書かないでほしい」と。一瞬、記者団は発言の内容をつかみかねて怪訝な表情を見せ、やがて私のところに大平発言の真意について質問してきたのである。私は思い当たるところをかいつまんでこう説明した。

かつて池田内閣がはじめて誕生し、その官房長官になったとき、池田首相に「これからは国民と苦楽をともしなくてはならない。芸妓の出る宴席やゴルフに行くことは慎んでほしい」と直言したことがあった。大平さんはおそらくご自分の直言を思い出したに違いないと。翌日の新聞には、大平さんの優勝について各紙ともただの一字も出ていなかった。このように思索の人であり、限りなく奥深い人であった大平さんには自己顕示欲はみじんも感じられなかった。また理想に向って直進するというタイプの政治家ではなかった。「一利を興すは一害を除くにしかず」を座右の銘とし、「人生は結果よりも過程である」というゲーテの言葉を好み、「六十点主義」をモットーとした自然体で歩むしなやかな政治家であった。きれいごとの建前ばかり大言壮語する政治の世界にあって、大平さんは数少ない本音の政治家であり、できることと、できないことをはっきりと正直にいおうと努力した謙虚で誠実な政治家であった。

そして自民党の悩みはもとより全国民の悩みをただ一身に引つかぶって、それを辛抱強く耐え忍んできた。それが病床における「明けて常に思う、長夜の愁」という一文にあらわれている。民の悩みを自分の悩みとして、一身に背負われて昇天された偉大な宗教家でもあった。今日までの日本の政治文化の粋が生み出した、かけがえない卓越した指導者大平であった。誠に哀惜のきわみである。

(新日本証券会長)